

朴家と私
—いつも見方になってくれる人々—

グループK、 朴智永（パクジョン）

1. 紹介文

私に一番大切なコミュニティは朴家だ。それが何かと言うと家族だ。誰にでも、そうだとは言い切れないが、私は大切なコミュニティを考えると家族のことが一番速く思い出せる。考えてみると、誰よりも私のことを心のそこから思ってくれたり、いつも当たり前のようにそばにいてくれたのが家族だった。しかし、自分の国にいる時はそれが当たり前すぎて感謝しようと思ってもいなかったが、一人暮らしや海外での生活で今は誰よりも大事なコミュニティだということに気づいた。

その大事な家族を紹介しようと思う。父と母そして兄と私で四人家族だ。父は一見見ると厳しくて怖いけど、私たちのためなら、どんなこともしてくれそうな実は優しい父だ。また、母はいつも友達感覚で接してくれたり、私たちのことを分かってくれようといつも努力する夢のような母だ。また、兄は表現することは不器用だが、優しい人である。兄がどれだけ優しいかと言うと、小学校のとき、私の隣席だった友達がいつも私を見るとティーシャツを脱いでた、今でもわけ分からない行動だが、そのときはそれがあまりにもいやで学校に行くことすら苦しかった。何度も「そんなの見たくないからやめなさい！」と言ってもやめずに目を合わせるたびに服を脱いでた。それが我慢できなくて親に話すと、それを聞いていた兄が次の日、私のクラスに来て、隣席の友達を懲らしめてくれたことがある。そのように兄はいつも私のことを考えてくれる。

しかし、私は韓国にいるときは自分がどれだけ幸せな家庭に恵まれていたのか気づかずにいつも愚痴をこぼしたりしてた。今はもう家族がどれだけ掛け替えのない存在か分かるようになったので、一番大切なコミュニティは家族である。

2. 取材散歩に行ってみて

11月の7日と14日にグループKと一緒に散歩してきた。最初の7日はまず、プールに行って克幸さんのコミュニティ空間を見てきた。説明や自分が水泳部で何してるかを聞いている中ふと思ったのは、みんな自分らしい自分が出る場所を選択して書いたと思った。プールでいろいろなことを見た後、私の寮に移動した。実はつれてきたとしても、自分の家族はこれだと見せ付けるものはなかったので最初はすこし困っていた。しかし、みんな私の話を興味深く聞いてくれたり、質問してくれたので、思ったより楽しく話し合いができて嬉しかった。

そして、その来週である14日はチンシンエンさんの寮に行ってから千秋公園に行く予定だったが、彼女の寮で時間が過ぎてしまっただけで解散することになった。寮に行くと、彼女自分のことや家族関係や彼氏の話聞いて、よかった。一番面白かったのは、人が死んだ後見送る方法は3カ国が全部違ったので、そういう話題でみんな盛り上がって話したことが印象に残った。そして韓国、中国、日本の3カ国の人が集まっていたので、微妙なところでの文化差を感じてそこに気をつけながら話をしたら、

もっと面白かった。今まで何回かの集まりがあったが、こういうふうにみんな熱く話し合ったのはなかった。機会があればもっと話したいと思った。

3. 話し合い相手

私が話し合いたい人は兄だ。年がとることにつれて、だんだん二人の仲に目の見えない壁みたいなものができるようになった。小さいときはいつも一緒にお風呂に入ったり、部屋も一緒に使ったりしたが、成長して、部屋が分離されてからは一緒にいる時間もだんだん減ることになった。しかし、幼いごろは兄が大好きで、いつも追い回した。その影響で、幼いごろの思い出はテクオンドーや自転車、インラインスケート、さまざまなゲーム、山登りだった。兄はめんどろがったんだが、それでもいつも私に気を遣ってくれた。

4. 話し合い結果

私は話し相手として兄を選んだので、顔を合わせて話し合いはできなかったが、久々に長く電話したので個人的とても嬉しかった。私が多文化コミュニケーションという授業を聞いていて、家族を大切なコミュニティとして選んで、さらに兄を話し相手として選んだよといったら、最初は爆笑しながらなぜ自分を選んだかについて突っ込まれた。だったので電話して何十分は余談ばかりだった。しかし、その後真剣な話だったかと言うとそうでもない、私が日本に来る前に飼っていたハムスターについての話しや、軍隊が終わって復学した学校はどうかについてのわりと軽い話題の話しだった。こういう日常生活のことについて話してたら、ふと妙な気分になってきた。ほぼ2～3年ぐらいはこんな長く話したこともないし、兄の考え方も聞けることもなかった。しかし、他の機会ではなく、授業を通して兄と電話するようになった点が自分なりに特別経験だった。話し合いをしながら感じたのは、兄は私が思ったより私のことを考えてくれているということだった。そして、私も自分が思ったより兄のことが好きだったと思った。もし、韓国にいたらこんなに長く話し合える時間はなかったと思う。また話し合いが終わって電話を切った後、兄との幼いごろの思い出でもっと家族に会いたくなかった夜だった。

5. 朴家と私

学生時代は「家族」というコミュニティが当たり前すぎて、どれだけ大切なのか分からなかった。しかし、浪人することになってから一番強く思った感情は「大切な人」だと思ってた人々だとしても時間がたってみると実はそうでもないことだった。卒業してから勉強だけに力を注ぐため、一年間家族以外は連絡をしなかった。そのまま一年が過ぎたら、もはや連絡しにくい相手になってしまった人々もいた。しかし、家族は長く連絡しなかったとしても、すべてのことを理解してくれる。実はそのコミュニティには連絡はそれほど重要でもなく、困ったときはいつでも気軽に連絡して助けを求めることが

できるのだ。それを実感してからは家族というコミュニティを大切にしないといけないと強く思った。なので、今からでも、親孝行しながら生きて生きていきたいと思ってた。実はまだ学生なのでそこまで大きなものとかはあげられないかもしれないが、今の自分にできることを精一杯していきたいと思う。親から与えられた人生を責任もって生きて、いずれ立派な人になって、親を喜ばせたいと思う。こんな思いを忘れずにもって生きれば、きっとそんなふうになれると思う。また、兄のこともちゃんと尊重しながら良く生きていきたいと思う。学生時代は家族へのありがたさを知らなかったが、今は強く実感してるので、今からでも自分の感謝する気持ちや好きな気持ちをありのまま伝えながら生きていきたい。今も十分幸せだが今後もっと「心のそこから幸せな朴家」と言えるようになりたいと思う。

6. 「コミュニティ」「コミュニケーション」とは何か

まず、この授業を通して思った「コミュニティ」の意味はさまざまだが、その中でも強く思った意味は「作られているもの」だと思う。自分にとって「コミュニティ」はいくらでもある。また、作ろうとするといくらでも作れる。しかし真のコミュニティと言うのは自分で作るものではなく、気が付いたら作られているものだと思う。自分で努力して作っていくコミュニティも大切だが、いつも自分のそばにいるから、当たり前すぎて気づかない「作られているもの」であるコミュニティに早く気づき、それを大切に考えながら生きていくのが重要ではないかと思う。

また、私が思った「コミュニケーション」とは「コミュニティ存続を深くする手段」である。自分がどれだけ大切に思ったとしても表現しないと何の意味もない。つまり、自分の大切なコミュニティに気づき、それを大切に存続していくには「コミュニケーション」と言う媒介体が非常に必要になるわけだ。したがって「コミュニケーション」はコミュニティを存続させる媒介体とも言えるだろう。

7. クラスについての感想

多分化コミュニケーションで「コミュニティ」と言う話題でレポートを書くようになって、家族と話し合える時間が増えた。特に兄とは話し合い以来、頻繁に連絡を取るようになった。もともと、浪人以来家族については格別な感情を持っていたが、この授業を通してその感情がさらに固くなるきっかけとなった。

また、毎週同じグループメンバが思う大切なコミュニティを読んで、話し合いをしていたら、課題を読んでいるのではなく、秘密の日記状を読んでいる気がした。私だけの考えかも知れないが、グループメンバと秘密を共有してみたみたいで、もっと親しくなった気がした。